

大学生に対する質問紙調査をもとにした
高等教育におけるオンデマンド授業デザインの提案
Suggestions for on-demand instruction in higher education
Based on a survey of college students

岩崎千晶（関西大学教育推進部）

紺田広明（福岡大学教育開発支援機構）

Chiaki Iwasaki (Kansai University, Division for Promotion of Educational Development)

Hiroaki Konda (Fukuoka University, Institute for the Development and Support of
Higher Education)

要旨

本研究では、大学のオンデマンド授業に関する質問紙調査を学生に実施した。調査の結果、約8割の学生は「オンデマンド授業に満足している」と回答し、「毎週提供される」オンデマンド授業を最も好んだ。講義映像に関してはスライドがあると講義内容を分かりやすいという理由で「教員の映像とスライド」と「教員の音声とスライド」を好む学生が多かった。またオンデマンド授業で一方的な講義映像の提供だけではなく、小テスト、ミニレポート、掲示板などの学習活動と組み合わせ、双方向の場を提供している教員が多いことも示された。一方、復習や質問をしたりして自律的に学ぶと回答した学生は約半数で、学習プロセスを支援する必要性が指摘された。

キーワード オンデマンド授業、オンライン授業、ICT教育、高等教育 / On-Demand Courses, Online Courses, ICT Education, Higher Education

1. 研究の背景

2020年以降、高等教育においてオンデマンド授業が容易に実施できる環境が整備された。教員らは講義を動画として提供する能力を得て、対面授業の開始後も、必要に応じてオンデマンド授業を継続して実施している（山内、2021）。大学において、こうしたオンデマンド授業の効果が確認され、研究知見も提供されている（例えば森・松下、2021）。また文部科学省（2020）はコロナ禍以後においても、すべての授業を対面授業に戻すのではなく、授業の一部をオンライン授業として継続的に実施することを提案していることもあり、今後はオンライン授業のよさと対面授業のよさを生かしたカリキュラム設計が期待されるだろう。

コロナ禍においては九州大学、関西大学、京都産業大学などの大学がオンデマンド授業を含むオンライン授業に対して全学的な調査活動を実施している（九州大学、2020；関西大学教学IRプロ

ジェクト、2020；京都産業大学学長室IR推進室2021）。これらの調査は急ごしらえで実施したオンライン授業に対して、「学習者が学ぶことができているのか」や、「学習者が抱える課題」などについての調査項目が中心であり、学習の質保証や課題に対する解決策を見出すために実施されていることが多かった。その結果、各大学は学習の質保証を確認したり、課題への対応策を提供したりしている。

現在は急ごしらえのオンライン授業ではなく、通常の対面授業と同じように、オンライン授業をカリキュラムに組み込む大学が増えてきた。例えば、福岡大学では2021年度から15回授業のうち1回（福岡大学、2023）、同志社大学では2024年度から15回授業のうち2回はオンデマンド授業を受講することになっている（同志社大学、2023）。同志社大学では、第1回目の授業がオンデマンド形式で、シラバス、授業内容、当該科目を履修す

ることによって育成できる能力などに関する授業が行われる。その後、2回目から14回目までは対面授業で、2回目のオンデマンド授業は第13回目の授業が終わった後から、成績評価が終わるまでに実施される。2回目のオンデマンド授業では、授業の総括や試験の振り返りに関するフィードバックが提供される。オンライン授業の中でも、とりわけオンデマンド授業は講義する場所や時間を問わずに行うことができるため、コロナ禍以後もこうして継続して実施する大学がある。

オンデマンド授業は講義映像をネット上で提供する授業とひとくくりにはできない。例えば活用される講義映像は音声や映像のみの講義映像、音声や映像とスライドを組み合わせた講義映像など、さまざまな種類が存在する。また、オンデマンド授業と組み合わせた学習活動やオンデマンド授業の提供方法に関しても、多様な形式が考えられる。

このような背景から、オンデマンド授業に関して、どのような講義映像や学習活動が望ましいのか、また提供方法はどうか、あるいはよいのかについて、オンデマンド授業を受講している学生に対し調査をして、オンデマンド授業の実態を把握し、今後のオンデマンド授業に活かす必要があるのではないか。これらを明らかにすることで、質の高いオンデマンド授業のデザインに役立てることができると考える。

2. 研究の目的

本研究の目的は、大学においてオンデマンド授業を受講する学生を対象に質問紙調査を行い、オンデマンド授業の提供方法、オンデマンド授業に関連する学習活動や学習経験、オンデマンド授業に関する満足度について明らかにし、オンデマンド授業のデザインについて提案を行うことである。

3. 研究の方法

大規模私立大学 A 大学において、2022 年秋学期に教職科目を受講する学生 94 名を対象にアン

ケート調査を行った（岩崎・紺田、2023）。回答者は2、3年生を合わせて90名（96%）で、そのほかは4年生、修士課程などが4名であり、オンデマンド授業を複数年受講した経験を持っていた。質問項目は、相原（2015）、山田（2018）を参考にオンデマンド授業に対する「受講科目、履修選択、提供方法、学習活動と学習経験、評価方法とフィードバック、満足度」などについて、選択式（経験に関する質問は複数選択可）と自由記述式で尋ねた。

4. 結果と考察

4.1. オンデマンド授業の受講科目数・履修選択

「2021年度と2022年度のオンデマンド授業の受講科目数」の結果を図1に示す。2022年度のオンデマンド授業の受講科目数は、2021年度より減少しており、0～2科目との回答が約6割であった。2021年度は、「6から10科目程度」が29名（31%）と最も多く、次いで「3から5科目程度」が24名（26%）、「2科目程度」が18名（19%）であった。2022年は「2科目程度」が33名（35%）、次いで「0科目（オンデマンド授業がない）」が25名（27%）、「3から5科目程度」が20名（21%）となっていた。よって、2021年度よりも、2022年度の方が受講科目数は少ない傾向にあった。大学はオンデマンド授業から対面授業に移行している様子がうかがえる。しかし、7割強の学生は継続してオンデマンド授業を受けている状況が示されており、オンデマンド授業が定着している様子

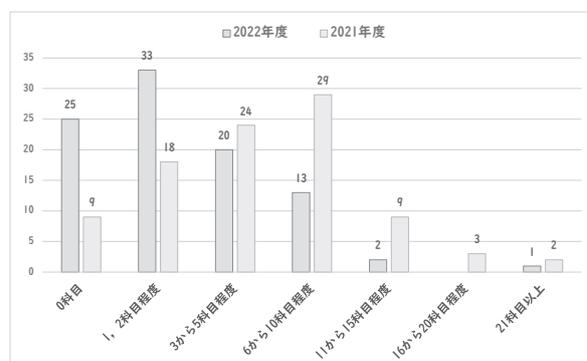


図1 2021年度と2022年度の受講科目数

が見受けられるため、よりオンデマンド授業の質を確保していくことの重要性が改めて示された。

次に「対面とオンデマンド授業に関する履修希望」の結果を図2に示す。オンデマンド授業と対面授業の履修選択（必修を除く）に関しては、「対面・オンデマンドに関わらず履修したい科目を選択している」が51名（55%）で、約半数の学生はオンデマンドであるかに関係なく履修を選択している。

一方「対面授業」を選択している学生は10名（11%）で、「オンデマンド授業」を選択している学生は11名（12%）で同程度であった。また、約4分の1の学生である22名（24%）は、「学部や学科で履修科目がほとんど決まっており、選択する余地がない」と回答した。学部や学科により、オンデマンド授業を受ける学生の割合が異なることが想定された。オンデマンド授業を選択するようになっているという学生が一定数存在することからは、どの程度の学生がオンデマンド授業を受けているのかについて各学部や学科で把握し、学習の質の保証を確認する必要性が見受けられた。

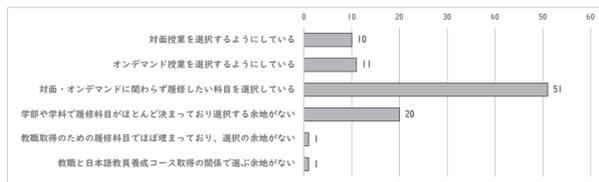


図2 対面とオンデマンド授業に関する履修希望

4.2. オンデマンド授業の提供方法

「オンデマンド授業の提供時期と提供方法」の結果を図3に示す。提供時期は、「毎週提供される」が最も多く91名（97%）であった。他の提供時期についての経験は少なく、「毎週提供、加えてリアルタイム配信も提供される」が18名（19%）、「学期はじめにすべて提供される」が6名、「学期に数回に分けて提供される」が7名と少数であった。

最も好きな提供方法は、経験と一致して「毎週提供される」が69名（73%）であった。自由記述でその理由を尋ねたところ、56件中42件の学生

が「1週間という期間だったら取り組みやすいから」「1週間のルーティングが決められるから。計画的にできるから」といった自ら計画的に取り組めることのよさが挙げられた。毎週オンデマンドの講義映像を提供することで学生の学習リズムが整えられていた点が改めて確認できた。

次いで、「学期はじめにすべて提供される」が16名（17%）であった。自由記述に寄せられた理由（12件）を見ると、そのうち10件が「やりたいときにやれる」「一括で見れる方が確認しやすい」といった自分の都合のよい時間に合わせて学ぶことができる点をよさにあげた。また2件は「授業の見通しが持てるから」「好きな時間に受けられるから、先行して課題などを行っておけばテスト期間に楽ができるから」といった、授業のゴールや全体の学習課題を見据えたうえで、自分のペースで学んでいくことのよさを挙げた。

調査の結果から、毎週講義映像を提供されることで、学生は学習に取り組むリズムを整えられることによさを感じていた。毎週教材を提供することがオンデマンド授業にとっては重要な要素になると言える。しかし、学習者の学習スタイルは様々であり、中には授業全体の見通しをもって、学びたい学生や、授業のペースよりも先に学びたい学生が一部存在することも示された。

どのような学習スタイルの学生が受講生として存在するのかについては、授業開始時に調査を実施するなどして、希望を確認した上でオンデマンド授業の提供方法を検討する方法があるだろう。

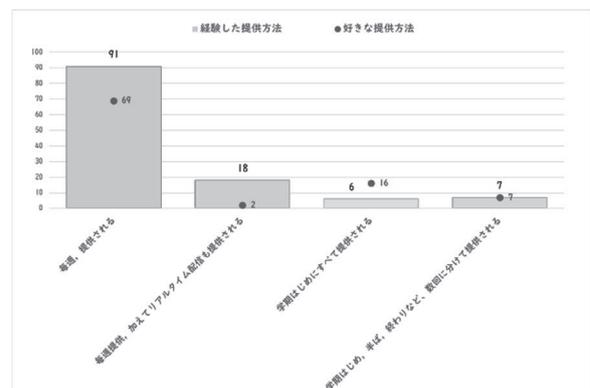


図3 オンデマンド授業の提供時期と提供方法

「オンデマンド授業で受講経験がある形式」の結果を図4に示す。オンデマンド授業で受講経験がある形式としては「教員の映像とスライド」75名(80%)、「教員の音声とスライド」65名(69%)が多かった。「資料のみ」47名(50%)も半数が経験していた。加えて、いずれかの「教員の映像」(前半の選択肢1~4)での授業を経験しているのは83名(88%)であり、いずれかの「教員の音声」(選択肢5~8)を経験しているのは74名(79%)であった。「スライド」(選択肢2, 4, 6, 8)は90名(96%)、「ホワイトボード」(選択肢3, 4, 7, 8)は34名(36%)であった。

学生が最も好きな形式は、「教員の映像とスライド」が33名(35%)、「教員の音声とスライド」が32名(34%)であった。最も多く経験した形式を最も好きであると回答する傾向であった。「資料のみ」は経験の割には好きだと答えた学生はやや少なく10名(11%)で、「教員の映像とスライドとホワイトボード」も10名であった。

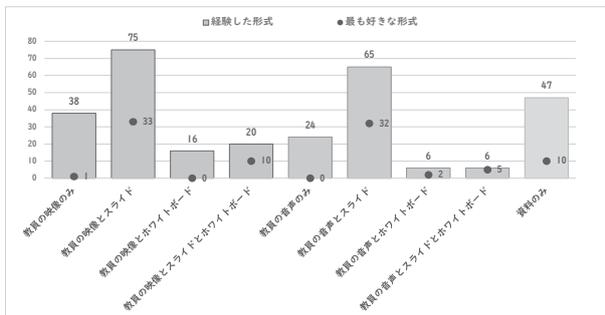


図4 オンデマンド授業で受講経験がある形式

これらの結果から、オンデマンド授業の講義映像の提供方法には多様な種類があることがわかる。学生が最も好む形式は、「教員の映像とスライド」であった。「教員の映像とスライド」を選択した理由(自由記述)には、スライドがあると学習内容が分かりやすいといった意見が25件中14件あった。学生からは「スライドがあると、何の話をしているのか一目でわかるし、先生の顔が見える方が安心するから」「スライド付きだとわかりやすい」といった意見が寄せられた。

次いで「教員の音声とスライド」であった。そ

の理由としては29件中16件が「内容が把握しやすいから」「スライドがあることで今何をやっているのかわかりやすい」のように、スライドがあることで学習内容がわかりやすいといった意見が挙げられた。また教員の姿がなく、音声のみの提供であるため、授業に集中できるという意見も寄せられた。

これらの結果から、学習内容がスライドに表示されていることは授業のわかりやすさに影響していると推察され、スライドの提供はオンデマンド授業に重要であることが示された。一方、講義動画に教員の姿を提示するかに関しては、教員の姿があったほうが安心すると回答した学生もいれば、教員の姿がない方が授業に集中できると回答した学生もおり、学生の好みによって変わることが示された。

4.3. オンデマンド授業に関わる学習活動

「オンデマンド授業に関わる学習活動」の結果を図5に示す。オンデマンド授業におけるプレゼンテーション、学生同士の交流、授業外に課題の準備で友人と学ぶなど、学生の活動を伴う学習経験は、約4割の学生が経験していた。しかし、全ての項目において約半数が経験していないと回答した。特に「オンデマンド授業のプレゼンテーションの経験」51名(54%、そう思わない、あまりそう思わないの計、以下同様)、「プロジェクト学習が組み込まれ、他の学生と学んでいる」57名(61%)、「様々な立場の意見の討論」62名(66%)、「地域密着プロジェクトへの参加」73名(78%)は少なかった。学生の積極的な言動や交流が必要な活動を経験するオンデマンド授業は多くはない状況であった。

これらの結果から、オンデマンド授業において、教員や受講生同士の交流を重視したものや、授業外に課題の準備で友人と学ぶような活動を取り入れた授業もあることが示された。

オンデマンド授業が一方向的に教員が知識を提供する形式の授業だけではないことがわかった。一方、様々な立場の意見を討論したり、プロジェ

クトへの参加をしたりする学習活動はオンデマンド授業に取り込まれることが少ないことが改めて確認され、これらは対面授業で実施されていることが推察された。

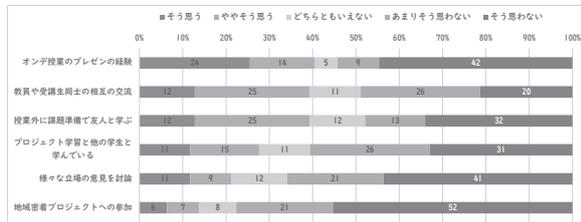


図5 オンデマンド授業に関わる学習活動

次に「オンデマンド授業における学生の学びへの従事」の結果を図6に示す。学生は約3割〜約半数がすべての選択肢において行っていると回答し、学びに従事している様子が示された。しかし、いずれの回答でも、「どちらともいえない」との回答が20名前後存在した。「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生と合わせると、「復習をして自分の中で整理統合」する項目を除いたすべての項目で約半数かそれ以上の学生が学びへ従事が十分ではない現状がわかった。

各項目を見ていくと、「復習をして自分の中で整理統合」53名(56%、そう思う、ややそう思うの計、以下同様)、「オンデマンド授業に時間と労力をかけている」44名(47%)、「実社会の体験と関連性を探究」47名(50%)は、割合が高かった。半数程度になるが、学びにおいて基本的な活動を行っている様子がうかがえる。

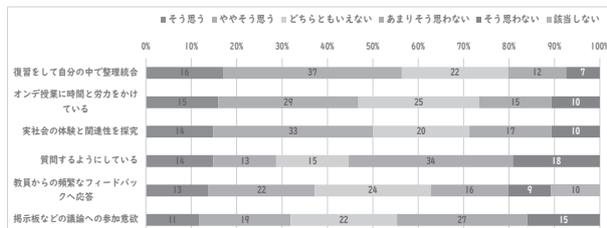


図6 オンデマンド授業における学生の学びへの従事

一方「質問するようにしている」52名(55%、そう思わない、あまりそう思わないの計、以下同

様)、「掲示板などの議論への参加意欲」42名(45%)となっていた。特に学びへの関わり意識が低い活動と見られるが、そもそも質問や議論などは必要性を感じる事が少なかった可能性もある。

本調査の結果からは、学習活動が教員から提供されたとしても、そこに学習者が従事するのかどうかについては学習者によって大きく変わることが改めて示された。「復習をして自分の中で整理統合」をすると回答した学習者は半数を超えたが、それ以外の全ての項目において「どちらともいえない」「あまりそう思わない」「そう思わない」と回答した学生が半数を超える結果となった。これらのことからオンデマンド授業ではより一層学習プロセスを確認する学習活動を取り入れるなどして、学習者が学ぶことができているのかについて確認をする必要があるだろう。しかし、こうした状況は対面授業でも同様のことが言える可能性はある。学習者が授業に出席していることは、学習者が学んでいることとイコールにはならない。いずれのスタイルにせよ、学習者が自律的に学ぶことができるのかどうかは、学習者により大きく異なることが示されたため、自律的に学習者が学ぶことができるように学習プロセスの支援や学習成果の確認が求められる。

次に「オンデマンド授業の受講経験がある学習活動と最も好きな学習活動」の結果を図7に示す。「選択式の小テスト(記述問題を含まない)」82名(87%)、「ミニレポート(100〜400字程度)」80名(85%)、「レポート(1000〜3000字程度)」72名(77%)、「記述式問題を含んだ小テスト」57名(61%)の順で多かった。「質問する(個別質問)」40名(43%)、「掲示板やチャット機能を使った意見交換」31名(33%)で、半数弱の学生は質問や意見交換の経験があったと回答した。

好きな学習経験は、「選択式の小テスト(記述問題を含まない)」が46名(49%)で最も好まれている。次いで、「ミニレポート(100〜400字程度)」が29名(31%)で、これらが約8割を占めた。

「レポート(1000〜3000字程度)」と「記述式問題を含んだ小テスト」の文章を書く課題は、経

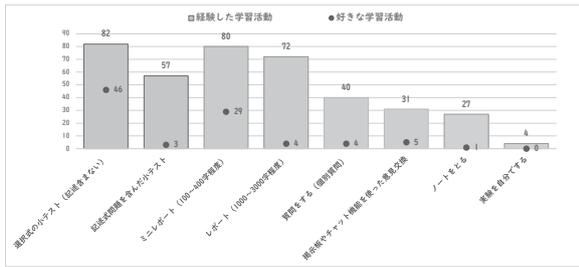


図7 オンデマンド授業の受講経験がある学習活動と最も好きな学習活動

験の割に学生には好まれていなかった。

オンデマンド授業で学習者に課される学習活動は、小テスト、ミニレポート、掲示板やチャットを使った意見交換と多岐にわたっており、オンデマンド授業は講義映像のみを提供する授業ではなく、講義映像に加えて何らかの学習活動も提供される傾向が高いことが示された。これらの結果から、教員がオンデマンド授業においても、学習者が主体的に学べる活動を設け、レポートや掲示板などで学習者の意見や理解度を確認したり、小テストで理解度や躓きを確認したりしようとしている様子が指摘された。

また、稲葉他(2022)によると、講義や演習といった授業形式に関わらず、大学教員がオンライン授業で「授業を理解していた」「課題に積極的に取り組んだ」「鋭い質問や意見があった」といった学生の様子を感じることは、「オンライン授業を成功裏に行える」という授業に対する自己効力感の向上に影響を及ぼすことが示されている。稲葉他(2022)の研究はオンライン授業を扱っておりオンデマンド授業に限定したものではないものの、オンデマンド授業に学習者の学習活動を取り入れ、学習者の意見を知ることは教員がオンデマンド授業を実施するうえでの効力感を向上させ、教員自身のオンデマンド授業へのモチベーションを向上させることにもつながるといえよう。こうした教員自身の自己効力感を上げるためにも学生の学習活動をオンデマンド授業に取り入れることのよさはあると考えられる。

4.4. オンデマンド授業に関するフィードバックと評価方法

「オンデマンド授業における評価」の結果を図8に示す。評価の仕方は、「小テストの平常点と最終レポート」73名(78%)、「ミニレポート(ミニッツペーパー)の平常点と最終レポート」64名(68%)の形式が多かった。

次いで、「中間レポートと最終レポート」42名(45%)、「小テストの平常点と最終テスト」41名(44%)であった。

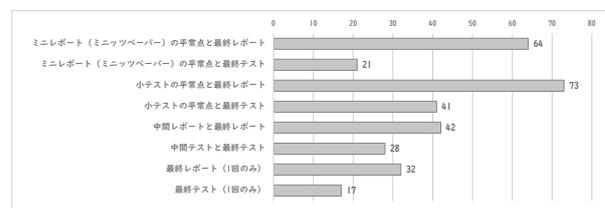


図8 オンデマンド授業における評価

オンデマンド授業におけるフィードバックの結果を図9に示す。「毎回フィードバックがある科目があった」62名(66%)、「2、3回に1度フィードバックがある科目があった」37名(39%)が多かった。一方、「フィードバックはほとんどない科目があった」は48名(51%)であり、フィードバックがない授業も回答者の半数は経験していた。

これらの結果から、教員は講義映像の視聴に加えて、小テストやミニレポートなどを平常点として評価を入れるようにして、形成的評価を取り入れている授業が、最終レポートや最終テストによる1度だけの評価で評定をつけるよりも多いことが示された。対面授業でも同様のことが言える可能性はあるが、オンデマンド授業において、教員が学習プロセスを評価する形成的評価を採用していることが多い様子が見受けられた。学習者が日常的に学ぶ機会を教員が評価している様子が推測される。

一方で、授業における教員からのフィードバックに関しては、「毎回フィードバックがあった」という回答の次に多かったのが「フィードバックはほとんどない科目があった」である。Online

Learning Consortium (2020) は教える立場からすると学習者が授業目標を達成できたかどうかの判断は評価に該当するが、学ぶ立場からすると、評価はフィードバックに該当すると指摘している。これらのことから、学習者にとってのフィードバックの重要性がわかる。小テストやミニレポートなどの学習活動が提供されている場合は、それらの学習活動に対するフィードバックが教員から行われると考えられる。しかし、講義映像を視聴することのみにとどまるオンデマンド授業の場合、教員からのフィードバックは、実施されない場合もあると推察される。フィードバックとは学習者の活動に対して実施されるものだからである。フィードバックがない場合、学習者がどこまで学んでいるのか、理解できているのかを確認する機会が十分にあるとは言い難い。特にオンデマンド授業の場合、図6の結果の通り、復習をして自ら学んだ内容を整理する学生は半数程度にとどまっているという学習者らの現状も踏まえると、彼らの自律的な学びを促すためにも、教員はフィードバックの方法についても検討する必要があるだろう。

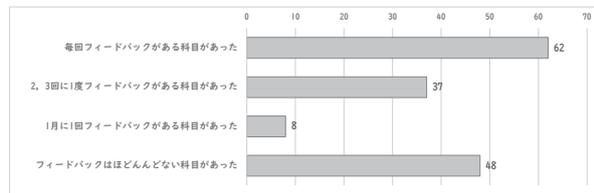


図9 オンデマンド授業におけるフィードバック

4.5. オンデマンド授業の満足度

オンデマンド授業の満足度とその理由を図10に示す。78名(83%)が「満足」(そう思う、ややそう思うの計)と回答し、「どちらともいえない」が9名(10%)、「不満足」(そう思わない、あまりそう思わない)は7名(7%)であった。

調査の結果から、約8割の学生は満足していることが分かった。満足している理由は、「好きな時間に受講できる」「何度でも映像を見直すことができる」「大学に行く必要がない」の選択割合が5割を超えていた。受講の便利さを満足の理由と考え

る学生が多いと言えよう。一方で、「大学に行く必要がない」という意見も半数以上の学生が回答していた。「大学に行く必要がない」ということが、学習者にとってどのような意味があるのかについては今後調査をする必要がある。

また「不満足」もしくは「どちらともいえない」と考える理由としては、「学習するモチベーションがわからない」「受講生同士で直接会って話ができない」「学習している実感がわからない」で、5割を超えた。オンデマンド授業の場合は学習に対するモチベーションを向上させるための取り組みがより求められることが改めて確認された。

	満足 (そう思う+ややそう思う)		不満足 (そう思わない+あまりそう思わない) (どちらともいえない+必要を要)	
	人数	割合	人数	割合
	78	83%	16	17%
理由				
1 好きな時間に受講できる	73	94%	4	25%
2 何度も映像を見直すことができる	51	65%	9	56%
3 時間をかけて課題に取り組みることができる	31	40%	10	63%
4 周囲の学生の態度などに気分を左右されることがない	1	1%	7	44%
5 対面授業と同様に理解が深まる	7	9%	5	31%
6 大学に行く必要がない	45	58%	8	50%
不満足理由				
1 先生と直接会って話ができない			4	25%
2 受講生同士で直接会って話ができない			9	56%
3 学習するモチベーションがわからない			10	63%
4 講義映像の視聴や課題をためてしまう			7	44%
5 大学に行って学習したい			5	31%
6 学習している実感がわからない			8	50%
7 そもそも学習効率が低い			1	6%
8 ほとんどオンデマンド授業を取っていないから分からない			1	6%

図10 オンデマンド授業の満足度とその理由

5. まとめと今後の展望

本稿では、高等教育においてオンデマンド授業を受講した経験がある学生を対象にアンケート調査を実施し、その調査結果を基に、オンデマンド授業の講義映像やその提供方法について提案を行った。

まずオンデマンド授業では「スライドを提供した講義映像が学習者にとってわかりやすい」ことが示された。またオンデマンド授業が一方向的に知識を提供するだけのものではなく、小テスト、ミニレポート、掲示板などさまざまな学習活動と組み合わせて提供されていることが多いことも見受けられた。しかし、これらの学習活動を教員が提供していたとしても、「自律的に復習をしたりして学んだり、オンデマンド授業に時間と労力をかけている」と回答している学習者が約半数程度にとどまっており、「計画を立てて自律的に学習することができる学生」と「学習に従事することが容易ではない学生」と二分されることが示された。そのため、これらの活動の重要性を学生に伝

えることや学習者の学習プロセスを支援するための取り組みが求められることがわかった。

評価の方法は形成的評価が採用される授業が多く、教員が学習プロセスを重視していることが示された。その一方で、フィードバックに関しては「毎回フィードバックを行う授業」が最も多く、次いで「ほとんどフィードバックがない授業」が多い結果となった。講義映像の提供が中心で、学習活動が提供されないオンデマンド授業の場合、教員がフィードバックを実施しにくい可能性が高く、学習プロセスを支援するための方法に課題があることが示された。

これらの調査は学生を対象としたものであり、教える立場にある教員の視点は欠けている。今後は、これらの結果を活かして、教員に対しても授業の映像構成や学習活動に対する調査を行う必要がある。

付記

本取組は2022年度関西大学教育研究高度化促進費「オンデマンド型授業における講義映像制作支援モデルの構築」の成果を公表するものである。また本論文は岩崎・紺田(2023)において報告した内容を発展させ、その成果をまとめたものである。

参考文献

- 相原総一郎(2015)「学生エンゲージメントの一考察：アメリカにおける学生エンゲージメント調査(NSSE)の発展をもとに」『高等教育研究開発センター大学論集』47, 169-184.
- 同志社大学(2023)『2024年度からの学年暦』(https://www.doshisha.ac.jp/students/new_calendar/index.html) (2023年12月26日)
- 福岡大学(2023)『学修ガイド』(<https://www.fukuoka-u.ac.jp/support/institution/class/guide/index.html>) (2023年1月12日)
- 稲葉利江子・高比良美詠子・田口真奈・辻 靖彦(2022)「コロナ禍のオンライン授業における

大学教員の授業効力感に影響する要因の検討」『日本教育工学会論文誌』46(2), 241-253.

岩崎千晶・紺田広明(2023)「大学生が受講するオンデマンド授業に関する実態調査」『日本教育メディア学会第30回年次大会発表収録』, 115-116.

関西大学教学IRプロジェクト(2020)『2020年度春学期実施「遠隔授業に関するアンケート」結果から見えたこと』(https://www.kansai-u.ac.jp/ir/online_survey_2020sp_digest.pdf) (2023年12月26日)

京都産業大学学長室IR推進室(2021)『オンライン授業等に関するアンケート(秋学期)調査結果【概要版】』(https://www.kyoto-su.ac.jp/about/torikumi/ir/s1gk4u0000084fgn-att/2020_au_online_qu_1.pdf) (2023年12月26日)

九州大学(2020)『九州大学のオンライン授業に関する学生アンケート(春学期)結果について』(https://www.kyushu-u.ac.jp/f/40309/20_08_11_01.pdf) (2023年12月26日)

文部科学省(2020)『大学等における新型コロナウイルス感染症への対応ガイドラインについて(周知)』(https://www.mext.go.jp/content/20200605-mxt_kouhou01-000004520_5.pdf) (2023年12月26日)

Online Learning Consortium, the Association of Public and Land-grant Universities, and Every Learner Everywhere. (2020). *Delivering High-Quality Instruction Online in Response to COVID-19 Faculty Playbook*, p.15, (<https://www.everylearnereverywhere.org/resources/delivering-high-quality-instruction-online-in-response-to-covid-19/>), (2024.01.07).

山田剛史 (2018) 「大学教育の質的転換と学生エンゲージメント」『名古屋高等教育研究』18, 155-176.

山内祐平 (2021) 「コロナ禍下における大学教育のオンライン化と質保証」『名古屋高等教育研究』21, 5-25.